

特別な配慮を要する子どもへのALTによる支援の実態と課題 —公立小学校ALTへのパイロット調査結果—

佐田久真貴*・Karen CHUA**

本研究では、外国人指導助手（ALT）の発達障がい特性のある小学生に対するかかわり方の実態と課題に着目し、B市に配属されている30名のALTへ質問紙調査を行ったものである。その結果、①LDについての認知度の低さ、②同僚やALT仲間と発達障がい特性のある児童について情報共有が少ないこと、③発達障がい特性のある児童とのかかわりについて、日本人英語教師（JTE）とのコミュニケーションを希求していること、が明らかとなった。また、授業中の児童による不適切な行動への対応や支援方法について、個々のALTの指導スキルに委ねられているケースもあった。学校の方針やJTEの体制によるところが大きい、特別な配慮を必要とする児童への効果的なかかわりには、ALTとJTEの連携や円滑なコミュニケーションが前提であり、この点において課題があることが示唆された。

キーワード：外国人指導助手（ALT）、発達障がい特性、小学生、コミュニケーション

【問題と目的】

グローバル化の加速、英語教育改革の施策などを背景とし、乳幼児期から日本語以外のことばに接する子どもたちが増えている。発達障がいやその疑いのある子どもたちも同様だ。特に、ことばの発達に遅れがあり、コミュニケーションの力に弱さのある子どもにとって、母国語以外のことばに晒される環境は様々な影響をもたらすだろう。これは、ネガティブな結果だけではなく、ポジティブな影響も含まれる。たとえば、敬語や謙譲語など、場面に応じた使い分けを求められる日本語に比べ、英語によるコミュニケーションの方が円滑な人間関係を構築し、維持しやすい場合もあるという点である。ところが、感覚過敏などの特性のために、集団行動やコミュニケーションを回避する傾向がある子どもたちもいるため、英語教育の場面においてスキルを発揮できない状態が維持されてしまう。一方で、英会話教室での体験や非言語コミュニケーション（ジェスチャーや表情変化など）によるやりとりが、彼らの成長を促したり、

様々なスキルアップにつながったりと、英会話教室の講師や外国人指導助手（Assistant Language Teacher：以下、ALT）の役割は非常に大きい。2020年の新学習指導要領では、英語が教科化されることが決まっている。学習に困難を抱える子どもとALTとのかかわりは増加することは確実だろう。

ALTは、1987年から「語学指導等を行う外国青年招致事業」（The Japan Exchange and Teaching Program：JETプログラム）の一環で複数の場で活動している。英語圏のALTはJETプログラム参加者の多数を占めており、非英語圏ALTや非英語圏・英語圏国際交流員（CIR）及びスポーツ国際交流員（SEA）も含まれ、令和元年度にJETプログラムは世界57か国から参加者を迎えている（自治体国際化協会、2019）。JETプログラム参加者の90%以上がALTであり、2019年8月2日現在で、5,234人が活躍している。日本の公立小学校、中学校での語学指導、各自治体の国際交流事業に携わり、地域の人々との交流を深めることを目的として活動中である。ALT向けには来日後の研修や、活動中の支援・メンタルサポートシステムなど、幅広くフォローされているが、発達

* 兵庫教育大学発達心理臨床研究センター

** インタラック関西東海

障がい児童への指導方法やかかわり方などに特化した研修はなく、配属校からの助言や日本人英語教師（以下、JTE）との連携に委ねられているのが現状である。大谷（2007）によると、文化的な背景の違いからJTEとの協働の困難さは顕在している。しかし田村・山下（2015）によると、ALTが抱える授業内外でのフラストレーションやトラブルは彼らの努力によって工夫されていることも報告されている。狩野・尾関（2019）が実施したALTへの大規模調査によると、授業前後のJTEとのコミュニケーションの有無が、授業の満足度に影響していることが明らかにされている。特別な配慮が必要な児童生徒とのかかわりについて、専門的知識や研修を求めるコメントもある。その多くは、授業中に不適切な行動を行う児童に対して、JTEが介入できず適切に対処しないことへの否定的な意見からだった。ただ、発達障がいに着目した質問項目はなく、その他にも発達障がいに特化したALTへの調査研究は見当たらない。

そこで本研究では、ALTが発達障がい特性のある子どもたちの“気になる行動”をどのようにとらえ、どのような工夫をしながらかかわっているのか、その実態を調査し、ALTが抱えている課題を検証し考察を行う。

【方法】

調査協力者

2019年8月現在、A県B市・C市の公立小学校で勤務しているALT30名（女性16名、男性14名、平均30.5歳、年齢範囲23–55歳）に質問紙調査を実施した。ALT対象の研修会にて説明を実施し、調査協力の同意が得られた30名に配布・回収した。

分析項目

- 1) 基礎情報：性別、年齢、ALTになる前の職歴、ALTとしての勤務年数、学歴と専門、出身国。
- 2) 発達障がいについての理解について
- 3) 発達障がいのある子どもやその疑いにある子どもを担当した経験と授業中に注意している行動項目
- 4) サポート源について
- 5) 発達障がいのある子どもにかかわり際の困っている点と工夫点（自由記述）

以上、項目に応じて選択式と自由記述式で構成された。

【結果】

本調査で得られた全体像を概観する（Table 1）。まず、性別の比率では女性が53.3%、男性46.7%だった。年齢は23歳以上55歳以下で、ALT歴は5ヶ

Table 1 プロフィールについて

(n=30)		回答数	回答割合 (%)
性別	①男性	14	46.7
	②女性	16	53.3
前職	①教員	2	6.7
	②一般企業	12	40
	③接客業	9	30
	④その他	4	13.3
	⑤無職	3	10
学歴	①4年制大学	28	93.3
	②大学院（修士）	2	6.7
専門性	①語学（英語）	5	16.7
	②語学（英語以外）	2	6.7
	③教育以外	20	66.7
	④特別支援教育	1	3.3
	⑤教育関連	2	6.7
出身国	①英語圏（USA, UK, オーストラリア等）	18	60
	②アジア（フィリピン）	11	36.7
	③その他（日本）	1	3.3

月～22年であった。そのうち、1年～3年以内が最も多く約半数を占めた。また、ALTになる前の職業では、教育関連6.7%、一般企業40%、接客業30%、その他13.3%、そして無職が10%だった。全てのALTは4年制大学を卒業しており、6.7%が大学院を修了している。専門性に関しては、大学で専攻していた領域について尋ねたものである。その結果、英語教育16.7%、教育以外66.7%、教育関連が6.7%で、特別支援教育を専門としたALTも1名含まれていた。また、出身国についてはフィリピン（36.7%）とアメリカ合衆国、オーストラリア、カナダ等の英語圏（60%）が多くを占めていた。

次に、発達障がいについての各用語の認知について、すべてのALTは、発達障がい・自閉スペクトラム症・ADHDを「知っている」と回答した。ただ、局限性学習障害（LD）は26.7%が「知らない」と回答した（Fig.1）

また、担当するクラスに“気になる子”が在籍しているかどうか、あるいは診断を受けている子が在籍しているかどうかについて質問したところ、“気になる子”に関しては83.3%、“診断有の子”に関しては40%を占めた（Table 2）。

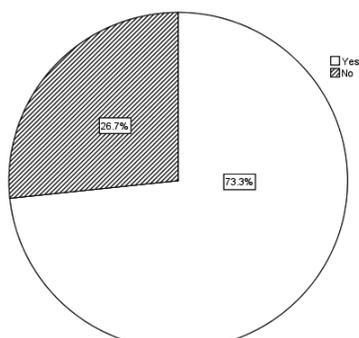


Fig. 1 LDを知っている

まず、前者の“気になる子”について何かあった際に同僚に相談したことがあるかどうかを尋ねると、72%が「No」と回答した（Fig. 2）。また、ALT仲間に相談したかどうかに関しては、92%のALTが相談しないと答えた（Fig. 3）。後者の“診断有の子”が在籍しているクラスを担当しているALTが、対象児について担任やJTEから事前説明があったかどうかについては、「all of the time（いつも）」が16%、「sometime（時々）」が46%、「hardly ever（めったにない）」が15%、そして「never（全くない）」が23%だった（Fig. 4）。その児童とのかかわりで困ることがあるかどうか尋ねた。その結果、「very much（非常に）」は0%だったが、「quite a lot（かなり）」が15%、「a little（少々）」は54%、「not at all（まったくない）」が31%を占めた（Fig. 5）。

次に、授業中に“気になる子”のどのような行動に気を配っているのかを尋ねた。15個の選択肢から該当するものを全て選択する方法とした。その結果をFig. 6に示す。最も多いのが「restless and wander in your class（授業中に落ち着きがない）」の60%、その次に「Do not follow your instruction（指示に従わない）」が50%、「difficulty with social interaction, communication（社会的相互作用や会話が困難）」が43%であった。

本調査では、ALTが授業中に困っていることと、実践している対処法や工夫について自由記述で回答を求めた。日本語訳に変換したものをTable 3とTable 4に示す。授業中に活動に参加できない児童や、ALTもJTEも制御できない児童の行動に困っていることが窺える。また、JTEからの情報提供がないことから、当該児童の行動が障がいによるものなのか否か判断できないことにも苦慮していた。

Table 2 特別な配慮を必要とする児童の存在 (n=30)

	気になる子		診断有の子		わからない
	在籍あり	在籍なし	在籍あり	在籍なし	
数	25	5	12	0	18
率 (%)	83.3	16.7	40	0	60

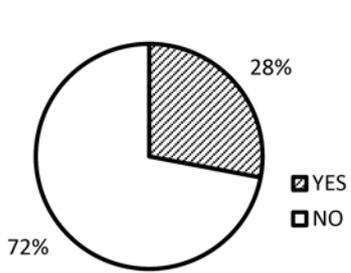


Fig. 2 同僚に相談した

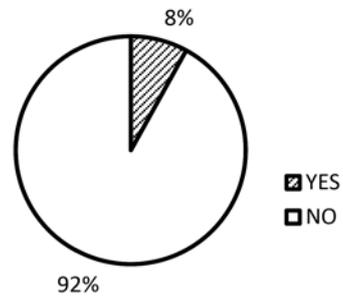


Fig. 3 ALT仲間に相談した

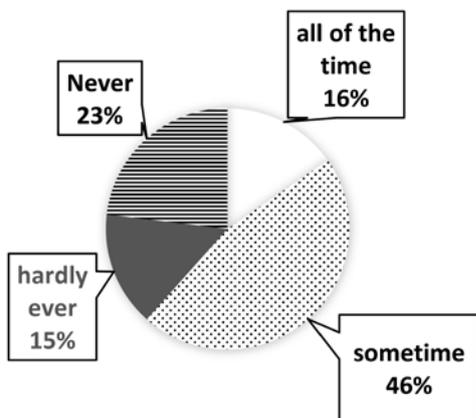


FIG. 4 “診断有の児童”についての事前説明

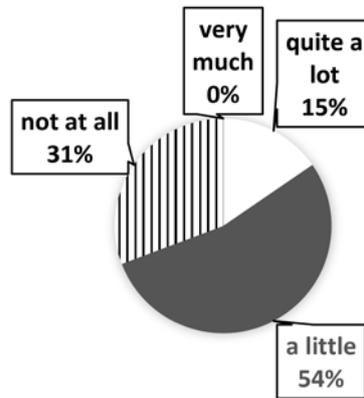


FIG. 5 発達障害児とのかかわりに困っている

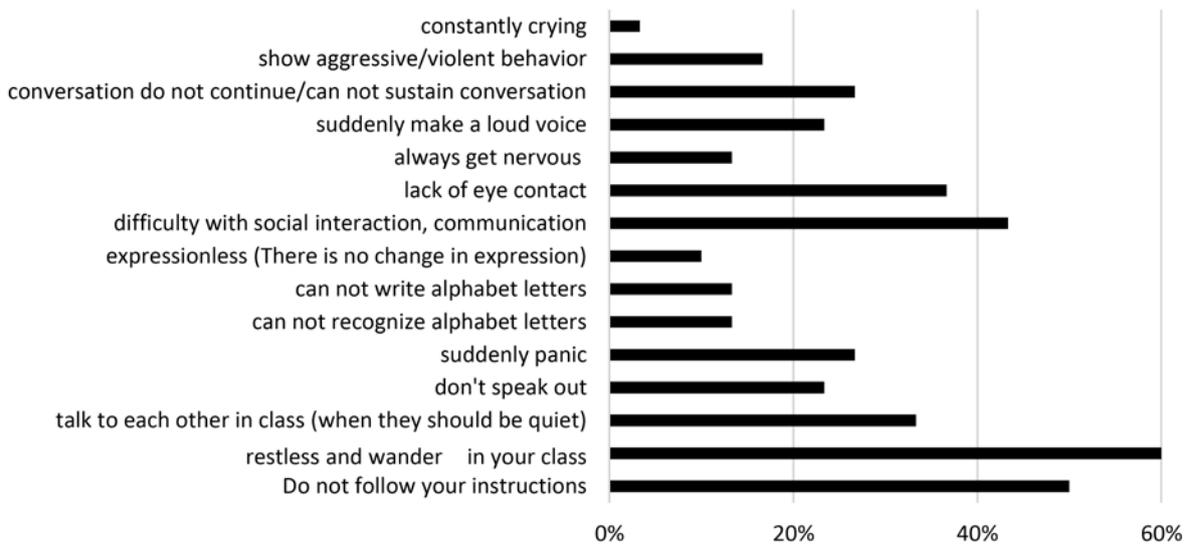


Fig. 6 ALTが着目している“気になる子”の行動

Table 3 “気になる子”が在籍している授業で困っていること（自由記述）

-
- ・ゲームなど活動で、周囲についていけない様子であること
 - ・活動自体が理解できず参加できない様子で、小さな虫に夢中になっていたり、自己ルールにこだわったり、一定の場所から離れなかったりする。彼らとかわかりたいと思っても、担当時間に限りがあったり、日本語での会話スキルに弱い自分がいるため、もどかしい。
 - ・児童によっていろいろだが、どの子も英語は楽しそう。だけど、特性ゆえに頭を前後に振ったり、参加しない時があったりする。
 - ・情報提供がないのは、特別支援が必要な児童にはJTEが接することになっているからかもしれない。
 - ・ある児童は、授業中に立ち上がり、教室の真ん中でALTの自分に話しかけてくる。JTEがそれに対し何もしてくれない。
 - ・複数の男子児童が、活動から外れたり、集中できなかつたりする。その子どもたちを授業に参加させることが難しい場合がある。そのような時には、他の児童が助けてくれることもある。
 - ・授業に参加しようとしないう児童に、ペアワークを促すことが難しい。
 - ・障害のためなのか、単なるいたづらなのか判断しにくい
 - ・JTEが気になる子へかわる時に、授業が中断してしまう
 - ・質問には答えられても、書くことができない
 - ・課題に従事できないことを周りの児童に注意されている
 - ・時々、集中できていないことがある
 - ・ゲームに競い合ってしまう
 - ・時々、教師や他の児童のじゃまをしてしまう
 - ・時々、攻撃的になる／危険な行動をする
 - ・ほぼ活動に参加できない
 - ・特別な配慮が必要な行動なのかどうか見分けるのが難しい
 - ・英語を話さないJTEと、日本語を上手く話せない自分が、子どもたちの支援について話し合うことが難しい
 - ・JTEとALTが、特別支援の対象児について調整したり話し合ったりできていない
 - ・JTEが子どもの行動をコントロールできていない。そのような中で自分が子どもを指導するのは難しい
 - ・クラス担任が、困った行動をする児童を指導できていない様子
 - ・例えば困った行動がADHDによる行動なのかどうか、見分けることが難しい。それ以上に、JTEに支援が必要なのではないかと持ち抱えること自体がデリケートなことで、できていない。
 - ・JTEから支援が必要な児童について説明がないため、自分でADHDかどうか、他の障害があるのかどうか想定してかわっている

Table 4 発達障がい児が在籍している授業での工夫（自由記述）

-
- ・できるだけ他の児童と同じように接しているが、全員の前で発表するような注目をあびることになる指名はしないようにしている。
 - ・課題を出すときは、彼らがゆっくりとりくめるよう工夫をしている。たとえば、時間を多めに与えたり、一度に与えるのではなく1つ達成したら次、というように様子を見ていく。
 - ・他の児童と同じように接している。
 - ・加配の教員が入ってくれた時は、彼らに（接し方を）確認している。
 - ・JTEにどうしたらいいか相談するようにしている。
 - ・発達障害の疑いのある児童も同クラスで授業を受けている。他の児童と同じように接している。
 - ・JTEに任せるようにしている
 - ・JTEがかかわってくれるし、他の児童と同じように接している
 - ・JTEの指導に任せるよう指示されているため、その子にできることがほとんどない
 - ・課題にできるだけ参加できるように促している
 - ・ゲームに負けると泣いてしまったり活動に参加できなくなる児童がいる。JTEが語り掛けたり、授業から離したりする。

また、授業での工夫に着目すると、「他の児童と同じように接している」と回答するALTは多い。その上で、対象児童の特性に応じた課題を提供したり、指示の仕方を工夫したりするALTもいることがわかる。「どうしたらいいかJTEに相談するようにしている」と記述も見られた。一方で、当該児童へのかかわりは「JTEに任せている」「JTEの指導に任せるよう指示されているため、できることがほとんどない」等の記述もあった。さらに、「(当該児童が)泣いてしまったり活動に参加できなくなったりする。JTEが語り掛けたり、授業から離したりする」という記述もあり、ALTの対応以前の状況や課題が確認された。

【考察】

1. 小学校ALTの属性について

本研究では、公立小学校に配属されているALTが授業中、どのように発達障がい特性のある子どもとかかわっているのか、その困難さと工夫について調査し、ALTが抱えている課題について検討した。全てのALTは学士を取得しているが、その専門性は多岐に渡っていた。アジア圏出身者は、英語教育を先行している割合が高いこと、全体的に語学や教育以外（例えば、経済学や社会学等）を専門に学んでいたことがわかる。ALTとして働く前も、教育関連や語学関連の職業は少なく、教育以外の分野で活動していたことがわかる。また、狩野（2018）の調査では、約半数が3年未満のALT歴であったが、今回の調査では5ヶ月～22年以上という幅のある結果ではあったが、3年未満が半数を占めており、同じ傾向にあることがわかる。また、狩野（2018）は、ALTとして日本で働く期間の心づもりを尋ねている。その結果、約6割が3年以上と回答しており、非常に短いことが窺えた。同時に、フラストレーションに着目した調査を行っており、いくつかの課題を指摘している。その中でも、日本の小学校教員（JTE）の多くが英語を使えないことも指摘されている。本研究では扱ってはいなかったが、自由記述では同様の内容が認められた。JETプログラムや民間

会社による採用の際に、ALTの日本語運用能力が求められるケースがあるという。彼らへ日本語能力を求めるのみではなく、JTEや担任から積極的にALTとかかわることこそ重要ではないだろうか。その中に、特別な配慮を必要とする子どもたちの情報提供や協働する授業システムが大切になると考えられる。

2. ALTの発達障がいに関する意識

今回の調査では、ALT自身の教育に携わる経験年数に関わらず、発達障がい、ASD、ADHDという用語についてすべてのALTが知っており、それぞれの認知度の高さが窺えた。しかし、それぞれの詳しい特性や正しい理解がどの程度なされているかは不明である。そして、LDについて「知らない」と回答したALTが少なくない。アルファベットやローマ字に特化したLDもあることや、LD支援に関しては欧米諸国の方が先進的である事実からすると、教育を専門としていないALTの多さがその要因の1つかもしれない。この結果は注目すべき点である。

次に、担当しているクラスについて尋ねた。担当クラスに発達障がい特性の疑いがある、いわゆる“気になる子”に関して、多くのALTがその存在に関心を示していた。落ち着きのなさや奇声など目立つ行動だけではなく、静かで目立たないタイプへの配慮も確認できる。さらに、ゲーム場面で考え込み、自分のやり方にこだわってしまう行動や、指示に従わないことに困っている様子が窺えた。先行研究では、子どもの問題行動にJTEが介入することを期待していることが指摘されている。本研究において多くのALTが同僚に相談することなく、また、ALT仲間に相談することもほぼないということが明らかとなった。自由記述から読み取れるように、ALTは自発的にJTEへ相談したり働きかけることをためらっているケースや、特別な配慮を必要とする児童はJTEがかかわる領域であると境界をひいているケースが認められる。さらに、JTEの対象児への指導が原因で、いっそう授業進行が困難になっている場合も訴えているケースもあった。先行研究では、発達障がいに関

する研修を期待しているALTの存在も報告されているが、対象児への対応はJTEに期待している傾向が強いことも窺える。ただ、事前に対象児に関する説明がJTEや担任からなされていたり、ALTの方から積極的に相談したりするケースも少なくない。このようなケースについて、詳細を明らかにしていき、事例を積み重ねていくことが今後の課題の1つと言えよう。

3. ALTの発達障がい児へのかかわりの実際

本調査から、担当クラスに発達障がいのある子どもが在籍していることについて、JTEや担任からの情報提供がない場合もあることが明らかとなった。本来、特別な配慮が必要な子どもについて、情報共有をすることやかかわり方についても共有することが個別支援計画の一環としても重要である。配属されている学校や担任・JTEの方針に委ねられている現状が窺える。

また、ALTの多くは発達障がい特性のある子どものかかわりについては、他の児童と同じように接しようとしている様子が窺える。ところが、授業が中断したり、いわゆる問題行動への対処方法に悩んでいるALTが少なくない。一部のALTは、自発的にJTEや加配の教師へ接し方を確認するようにしているが、対処できていない場面も少ないことが窺えた。JTEと話し合う場面を求めているALTもいるが、躊躇してしまう様子がある。先行研究でも、「JTEはシャイで関わってもらえない」「ALTへの要求や改善点等を言ってもらいたい」等と指摘するALTがいる。特別な配慮を必要とする児童への効果的なかかわりには、ALTとJTEの連携や円滑なコミュニケーションが前提であるが、この点にも課題があることが窺えた。

【まとめ】

発達障がい特性のある子どもへの早期発見・早期支援の取り組みやその成果は多くの報告がなされている（佐田久，2010；植松，2015；園田，2017）。また、特別支援教育が平成19年に本格的にスタートし、学校教育における発達障がい児支援は進んできた。チーム学校として、多職種が

連携・協働して子どもたちを支援する体制も注目されている。特別支援コーディネーターやスクールカウンセラー、そしてティームティーチングのシステムなど、教室の中に複数のスタッフが介入することは特別なことではなくなってきた。一方、2020年には英語が教科化され、英語教育改革の施策を背景としてALTの配置拡大が進んでいる（石野，2018）。ALTに関する先行研究は、文化的背景の差異やJTEとのコミュニケーションに着目したものから、最近では石野（2018）のようなALTによる日本の英語教育あり方そのものへ言及したインタビュー調査がある。しかし、発達障がい特性のある子どもに対するALTの意識や実態調査等はなく、本研究ではこの点に着目して調査を行った。今後、実際の授業場面でALTが行った工夫やオリジナルの支援方法、かつALTとJTEの連携の成果等を質的に追跡調査していく必要がある。さらに、就学前の英会話教室での日本人教師や外国人教師による発達障がい特性のある幼児へのかかわりに関する調査を進めたい。

【謝辞】

本調査にご協力いただきましたALTや関係者のみなさまに感謝申し上げます。

【引用文献】

- 石野未架（2018）. 退職を選んだ外国人指導助手（ALT）が語るティームティーチングの課題：アクティブ・インタビューを用いて。応用会話分析研究，33-42.
- JETプログラムホームページ[2019年8月20日最終閲覧]
- 狩野晶子・尾関はゆみ（2018）. 小学校ALTから見た小学校外国語活動の現状と課題。小学校英語教育学会誌 18(01), 116-131.
- Nate Olson（2019）. Perceptions on ALT Skills Training, Qualifications, and Motivations: From JTEs and ALTs on the JET Program. SOPHIA TESOL FORUM / Working Papers in TESOL (11), 28-41.

- 大谷みどり (2007). 外国人指導助手 (ALT) と日本の学校文化: 日本人教員とALT間における異文化要因. 島根大学教育学部紀要. 教育科学. 人文社会科学. 自然科学41, 105-112.
- 佐田久真貴 (2010). 保健センターにおける親子教室の有効性について: 最前線で母子保健活動を担う保健師と臨床心理士の連携. 小児の精神と神経 50(3), 303-314.
- 園田和江 (2019). 保育士養成校における発達障害児に関する意識調査 -より適正で効果的なインクルーシブ保育を実践できる保育士養成のために-. 宮崎学園短期大学紀要11, 55-63.
- 杉本均・山本陽葉 (2019). 日本におけるフィリピン人外国語指導助手(ALT)の雇用問題 --外国青年招致事業(JET)などを中心に-. 京都大学大学院教育学研究科紀要65, 179-200.
- 田村駿・山下直子 (2015). 外国語指導助手 (ALT) が抱えるフラストレーションの実態—ALTへのインタビュー調査をもとに—. 香川大学教育学部研究報告第1部 (143), 71-82.
- 植松勝子 (2015). 就学前発達障がい児支援の基盤整備に関する検討:—母子保健活動と保育園・幼稚園との連携—. 日本公衆衛生看護学会誌4(2), 139-147.

The reality and challenges of ALTs' support for children requiring special consideration -Results of pilot survey targeting ALTs assigned to public elementary schools -

Maki Sadahisa*, Karen CHUA**

*Department of Clinical Psychology, Graduate School of Education, Hyogo University of Teacher Education

**Interac Kansai & South Central Co., Ltd.

In this study, a questionnaire survey study was conducted on 30 Assistant Language Teachers (ALTs) assigned to City B focusing on the reality and challenges lying in how ALTs interact with elementary school students with traits of developmental disorder. The result revealed 1) poor awareness of learning disability (LD), 2) a little information sharing among colleagues and other ALTs on students with traits of developmental disorder, and 3) ALTs' sincere needs of communications with Japanese Teacher of English (JTE) on the interactions with students with traits of developmental disorder. In some cases, handling inappropriate behaviors of students in class is totally left in the hands of individual ALT's instructional skills. The results also suggested that the cooperation and smooth communication between ALT and JTE were the precondition for effective interactions with students requiring special consideration although the situation depends to a large extent on school policy and JTE system.

Keywords : Assistant Language Teacher (ALT), Children with developmental disabilities, elementary school student, Communication